

近世琉球における烽火（火立）のネットワークについて
—新城島・黒島・鳩間島を中心に—

崎原 恭子

Brief notes on network of Pre-modern beacon fires in Aragusuku Island, Kuro Island, Hatoma Island

Kyoko SAKIHARA

鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷

2016年3月11日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of
Hatomajima, Aragusukujima, Kuroshima Islands, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2016

近世琉球における烽火（火立）のネットワークについて —新城島・黒島・鳩間島を中心に—

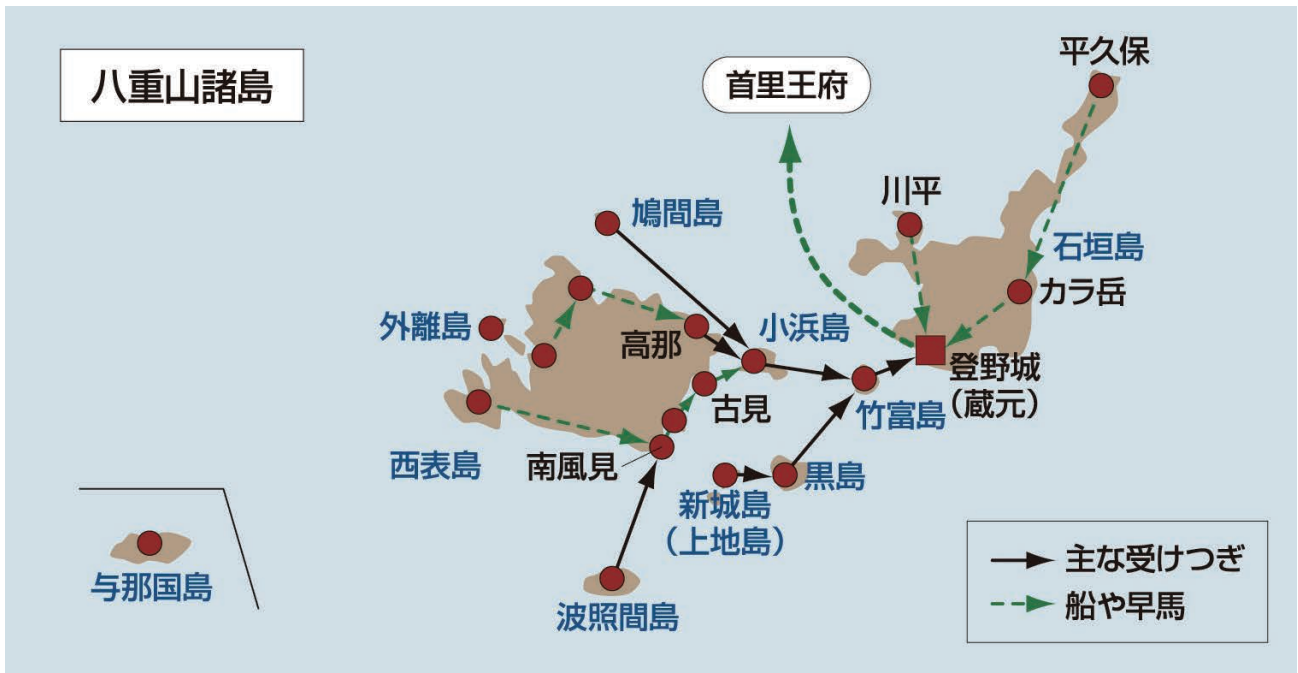
崎原 恭子*

Brief notes on network of Pre-modern beacon fires in Aragusuku Island, Kuro Island, Hatoma Island

Kyoko SAKIHARA*

琉球王国時代、王府は海上の監視や船の動向を把握するため1644年に国内各地に烽火をあげる場所を設置し、王府へ情報を伝達する経路を整備した(球陽研究会編, 1974)。この理由は、中国で起こった明から清への交替やヨーロッパ諸国からのいわゆる異国船の来航による国際的な緊張に備えたからだと考えられている(黒島, 1990、黒島, 1992)。王府による海上監視のシステムは、事始めおよび沖縄島周辺の烽火の制度を記載した『球陽』だけでなく、久米島や八重山での公務遂行や執務上の規定として布達された公事帳などからも知ることができ、王府

によって国内に広く徹底されていたことがわかる。烽火をあげていた場所は、より遠くをみるための石積みを伴う「遠見台」を兼ねていたところもある。そのため、これらには「遠見台」や「烽火台」、「火立所」、「火番盛」など種々の呼称がある。黒島為一氏は沖縄県歴史の道調査報告書(八重山諸島)において、用語の問題を指摘し、報告書内では「それぞれの固有名詞を用い、かつ、遠見台と総称する」としている(黒島, 1990)。本小稿もこれを踏襲し、烽火をあげる場所と遠くをみる場所と性格が異なるところについてはその都度示すようにした。



図：八重山諸島における烽火（火立）のネットワーク

参考：「富川親方八重山島諸村公事帳」「翁長親方八重山島規模帳」「沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ-八重山諸島の道-

※ 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, JAPAN

遠見台の設置場所については、沖縄県教育委員会による沖縄県歴史の道調査報告(沖縄県教育委員会, 1990) や市町村による現地調査や報告(名護市教育委員会, 1989、具志川村史編集委員会, 1976など)、島袋和幸氏による調査報告(島袋, 2010)などが行われてきた。2007年には宮古諸島および八重山諸島にある火番盛(ひばんむい・ぴーばんむる、遠見台のこと) 18カ所が国指定史跡「先島諸島火番盛」に指定された。

遠見台の現状として、現在史跡として保存されているところもあれば、わずかな石積みや伝承のみ残されているところ、土地の改変などによって所在不明のところなどがある。近世琉球の地図では、「正保国絵図」などの琉球国絵図(東京大学史料編纂所蔵)や薩摩藩調製図(沖縄県立図書館蔵)、18世紀末頃の製作と考えられる琉球国惣絵図(間切集成図)(沖縄県立博物館・美術館蔵)などに図示される。琉球国惣絵図(間切集成図)では、国頭間切・小禄間切・喜屋武間切に「火立所」、西原間切に「火立番敷」の表記で烽火に関する場所が記載されている。喜屋武間切の火立所の近くと西原間切の火立番敷には赤色屋根の家屋も描かれている。

琉球は国内の情報伝達手段として、人や馬、船を駆使するとともに、烽火をあげることによって情報を王府に伝えるしくみを整えていた。『球陽』には、進貢船や異国船が来た際に、進貢船2隻の場合は烽火2つ、1隻の場合は烽火1つ、異国船の場合は烽火3つをあげて、中継地点を経由して早々に情報を王府に知らせることが記されている。また、『翁長親方八重山島諸村規模帳』(1857年)には、遠見(遠目)番人の人数が記され、複数が輪番で任にあっていたと考えられている(黒島, 1990)。『富川親方八重山島諸村公事帳』(1878年)には、天気が悪く船を出せない状況下で八重山各地に船が漂着した場合において、烽火をあげる数と船の種類を区別した蔵元への情報伝達方法が記されている。琉球や中国の船が漂着した場合は立火(烽火)2つ、大和船の場合は立火3つ、外国船の場合は立火4つで情報を通達するということであった。さらには、伝達経路や烽火をあげる場所などについて、以下のとおり、村ごとの詳細な手順が記されている。

①西表・上原・高那村に船が漂着した際は、高那村

東の平川野にて烽火をあげ、小浜島、竹富島の順に受け継ぎ、石垣島の蔵元へ知らせること

②崎山・南風見・仲間・古見村に船が漂着した際は、古見村のかさ之辻(嘉佐崎)にて烽火をあげ、小浜島、竹富島の順に受け継ぎ、蔵元へ知らせること

③鳩間村に船が漂着した際は、東之森(鳩間島東海岸側)にて烽火をあげ、小浜島、竹富島の順に受け継ぎ、蔵元へ知らせること

④波照間村に船が漂着した際は、そひら森(コート盛)にて烽火をあげて南風見番所に知らせて、古見村から小浜島、竹富島の順に受け継ぎ、蔵元へ知らせること

⑤新城村に船が漂着した際は、たかねく(上地島のタカニク)にて烽火をあげ、黒島、竹富島の順に受け継ぎ、蔵元へ知らせること

⑥黒島村に船が漂着した際は、たわの辻(プズマリ)にて烽火をあげ、竹富島を中継して蔵元へ知らせること

このように、八重山諸島の火番盛(遠見台)についてはその伝達経路や遠見番に従事した人数などが記録されている。また、実際にどのような方法で烽火があげられていたのかについて、地元では検証も行われている。近年では、2007年に竹富町教育委員会が中心となって実施された。天候不良等の影響で点火状況のやりとりについて携帯電話を利用しながら烽火を確認していたようだが、現代の通信手段以前の方法について学ぶ重要な機会となったようである(沖縄タイムス, 2007、八重山毎日新聞, 2007)。

八重山諸島にある火番盛(烽火台)の眺望状況については、黒島為一氏や島袋和幸氏の調査によってこれまでも報告されている(黒島, 1990、島袋2010)が、今回、当館の総合調査を行うにあたって、2013年6月25日～28日に新城島・黒島・鳩間島の遠見台及び眺望場所の現状と眺望状況を確認する機会を得た。八重山諸島に分布する各遠見台は、より遠くを見渡すための石積みが設置されている場合が多く、基底はおおよそ円形や方形、高さは2m以上なかには10mほども石が積み上げられたところもある。石積みの現状としては、新城島(上地島)のタカニク、鳩間島の鳩間中森のようにしっかり残っていた場所もあれば、黒島のプズマリのように崩落の危険のため

立入禁止の場所もあった。また、遠見台の立地場所自体が植物の繁茂や牛の放牧地であるため簡単に立ち入ることができない場所もあった。眺望状況については100倍ズーム機能付きのカメラと方位磁石を用いておおよその範囲を確認した。ただ、今回の調査期間中、南風のカーチカゼ（カーチーバー）の影響で海上にモヤがかかっていたが、島影が見えたなかでおおよその眺望範囲を以下のとおり記録した。

(1) 新城島（上地島）

・クイヌパナ

国指定史跡に含まれていないが、新城島（上地島）の西側に面した港のすぐ側にある琉球石灰岩の断崖上に「クイヌパナ」という遠見台がある。陸地側から入る海岸沿いの小道を進みビーチロックを利用した17段の階段をのぼるとおおよそ五角形の平場に立ち、新城島（下地島）・西表島・小浜島方面の約210°の範囲を見渡すことができた。東南方向は生い茂った木々や丘があるため、海上をみることはできない。



写真1：クイヌパナ遠景



写真2：クイヌパナより下地島方面を望む

・タカニク

新城島（上地島）の集落から外れた北東側には、国指定史跡となった「タカニク」がある。三層の石積みから成り、小道から正面にある15段ほどの階段をのぼるとおおよそ円形の平場（直径約3.5m）があり、西表島・小浜島を望むことができる。新城島（下地島）や黒島は木々にさえぎられ一部しかみることができなかった。

新城島（上地島）にはその他に、島内で最も高い標高2.3mのウフドゥムールと呼ばれる丘にも遠見台があり、島の西側にある集落から東海岸に通り抜ける小道の右側に位置しているらしい。新城出身の安里眞幸氏によると、戦前には周囲に畑が広がり上まで登れたそうであるが、現在は植物が繁茂して立ち入ることができない状態であった。また、タカニクからもウフドゥムールをみることができたそうである。ウフドゥムールを通り過ぎた島の東海岸からは黒島をはっきりと望むことができたため、ウフドゥムールからの視界はかなり良好であったことが想定できた。



写真3：タカニク



写真4：タカニクより西表島の南風見方面を望む

(2) 新城島（下地島）

・中森（波照間ムリ）

新城島（下地島）の放牧地帯には、国指定史跡となった「中森（波照間ムリ）」がある。2～3層ほどから成る石積みの上から、崩落のため3段くらいしか確認できない階段をのぼると、ガジュマルの繁茂や石積みの崩落のため足場の少なくなった頂上に立つことができる。ここからは、西表島・新城島（上地島）・黒島、遠くは小浜島を含め約170°の視界が広がっていた。ただし、波照間島方面は木々の繁茂で全くみることができなかった。



写真5：ナカムリ



写真6：ナカムリより黒島方面を望む

(3) 黒島

・プズマリ付近の海岸（南西側）

黒島の火番盛（遠見台）には、国指定史跡となった「プズマリ」がある。9m前後の高い石積みが特徴となっている。近くには、現在の黒島ビジターセンターとなっている黒島の番所（役所）跡がある。現在、石積みの崩落のため頂上にのぼれなかった

め、近くの海岸から眺望状況を確認したところ、南西側方向に新城島の上地・下地島を確認できた。その他の遠見台は牧場内にあることが知られている。

また、黒島港からは竹富島や小浜島を望むことができ、八重山諸島の島々を視覚的に結べる状況を確認することができた。



写真7：プズマリ



写真8：プズマリ近くの海岸より新城島方面を望む

(4) 鳩間島

・鳩間中森

鳩間島の火番盛（遠見台）は、国指定史跡の「鳩間中森」がある。鳩間集落から北側に位置する島内で最も高い地点に設置され、近くには灯台がある。石積みは良好であり、30段ほどの階段をのぼると約3m四方の平場に立つことができる。南側の灯台や繁茂したビロウなどの植物がなければ、360°見渡せる眺望の良い場所である。西表島の上原や外離島の一部も望むことができた。ただし、小浜島はモヤのためみることができなかった。

また、鳩間島東海岸側にある鳩間小中学校付近は、

小浜島にある大岳への烽火をあげた場所であるが、通常確認できるはずの島影が、カーチカゼ(カーチーベ)の影響で確認することができなかった。



写真9：鳩間中森



写真10：鳩間中森より西表島上原方面を望む

以上のように、新城島・黒島・鳩間島における遠見台の現状等を確認した。現地にて確認できた時期がちょうど霧のかかる時期となってしまう、島影が望めない場所もあった。このような天候の場合は烽火をあげても島々の間でほとんどみえず、天候に左右される状況下の情報伝達方法の限界とも考えられる。しかし、史料に基づくと天気が悪く船を出すことができない場合に島々を結ぶ情報伝達手段として烽火が活用されていたことになっている。2007年の烽火の検証でも悪天候だったようであるが烽火を確認できる場合もあった。実際の烽火の運用について、烽火やその他の手段がどの程度まで有効であったのかが検証課題として残った。しかし、新城島・黒島・鳩間島の遠見台を確認することによって、八重山諸島国内の隅々まで海上監視を行い、迅速な情

報伝達のしくみを整備する王府の徹底さを改めて確認することができた。

末筆ながら、遠見台に関する様々なご教示を賜った安里眞幸氏および飯田泰彦氏(竹富町教育委員会町史編集係)に感謝申し上げます。

また、10年ほど前に遡るが、八重山諸島の烽火のネットワークについての的確なご教示を賜った黒島為一氏、精力的な調査・報告を続けている島袋和幸氏からも著作を通じて様々なご教示を賜った。ここに重ねてお礼申し上げます。

引用・参考文献(五十音順)

- 石垣市総務部市史編集室, 1994, 『石垣市史叢書』7
沖縄県教育委員会, 1988, 『沖縄県歴史の道調査報告書—中頭方東海道—』.
沖縄県教育委員会, 1991, 『沖縄県史料 前近代7』
首里王府仕置3.
沖縄タイムス社編, 1983, 『沖縄大百科事典』.
沖縄タイムス, 2007, 新聞記事「のろしりレー
島つなぐ」2007年11月10日(土)朝刊.
球陽研究会, 1974, 『球陽』読み下し編.
具志川村史編集委員会, 1976, 『久米島具志川村史』
具志川村役場.
久米島西銘誌編集委員会, 2003, 『久米島 西銘誌』.
黒島為一, 1990, 「第四章 八重山の遠見台」 沖
縄県教育庁文化課編『沖縄県歴史の道調査報告書
VII—八重山諸島の道—』.
黒島為一, 1992, 「烽火の制創設の背景」『地域と
文化』第71号 地域と文化編集委員会.
島袋和幸, 2010, 『沖縄の軌跡 沖縄烽火のネット
ワーク』.
玉津博克, 1991, 「産業・交通・土木遺跡と保存へ
の課題」『文化課紀要』第7号 沖縄県教育委員
会文化課.
今帰仁村教育委員会・今帰仁村立歴史文化センター,
1995, 『なきじん研究』vol. 5.
今帰仁村教育委員会, 2006, 『古宇利島の遺跡』.
名護市教育委員会, 1989, 『天仁屋バンサチ(番崎)
の火立跡調査報告書』.
八重山毎日新聞, 2007, 新聞記事「竹富町内7島

で「のろし」リレー 350年以上前の情報伝達を
再現」2007年11月9日(金)オンラインニュース.